

「我喜欢中国」 遠藤百華

はじめに

今回私は、2019年12月19日から2019年12月24までの6日間で実施された、日本青少年代表団・友好協会分団の活動に参加した。この訪中団で、実際に中国を訪れたことで、中国について多くの新たな発見があった。このレポートでは、自分が中国に興味をもったきっかけ、中国に抱いていたイメージ、実際に訪れて感じたことを率直に記していきたいと思う。

訪中団に応募したきっかけ

私は大学2年時の後半から半年間、中国の上海に留学していた。中国語は大学1年時から学習しているが、まだ思うように話すことができず、留学を終えても物足りなさを感じていた。ちょうどそのタイミングで、大学の教授に今回の訪中団の話を持ち掛けてもらい、応募を決めた。留学する前、中国に対して思い描いていたイメージは、治安が悪そう、怖い、など、消極的なものだったが、いざ生活してみると、そんなことはなかった。治安はそれほど悪くないし、逆に、美味しい料理や、中国の方の親切な人柄など、とても良い印象を受け、帰国後にまた中国に行きたいと強く感じたのも、今回参加を決めた理由であった。

訪中団に参加して

北京についてまず感じたのは、当たり前だが、やはり日本とは違うということだ。バスでの移動中、ガイドさんが説明してくれたが、交通ルールはもちろん法律で定められているが、日本のように、きちんと守られていないことが多く、日本人にとっては、少しひやひやしてしまうと感じた。片道6車線の道路もあるくらい、交通量が多く、混雑することも多いため、曜日ごとに制限を設ける制度があることを知った。このような制度は日本にはないが、混雑を軽減し、事故を防止するためにも、有効な手段であると感じた。

次に、中国の料理についてである。中国は広く、地方によって食材も味付けも異なるため、一言に中華料理ということではできないと感じた。北京に滞在した5日間で、香辛料が効いた辛い北京・四川料理から、甘い味付けて、フルーツなどが多く使われる広東料理、また、小籠包や餃子などの点心まで、ありとあらゆる中国の美味しい料理を堪能することができ、さらに、中国が好きになった。また、回転式のテーブルを囲み大人数で食事をする中国の食事スタイルは、コミュニケーションを取りながら食事を楽しめる上、いろんな料理を味わうことができ、とても良い文化だと感じた。

また、中国の人々について感じたことがある。日本人がよく抱く、中国人は怖い、怒りっぽい、などのネガティブなイメージがあるが、現地の学生や、お店の店員さんと交流してみると、そんなことはないと思う。怒っているのかと思ってしまうのは、中国語特有の発音のせいで、そう発音せざるを得ない、また、表情が怖くなってしまふのも、笑顔の口では正確に発音できないためでもあるのだと感じた。実際中国の人は、フレンドリーで親切だと感じた。北京城市学院を訪れ、文化体験で卓球をした際、城市学院の学生と交流した。私は拙い中国語であったが、学生との交流は本当に楽しく、中国語や卓球の技術を褒めてもらえたことが、とても嬉しかった。

最後に私は、日本の人にもっと中国に興味を持って欲しい、そして中国を訪れてほしいと感じた。今回の訪中団で訪れた、紫禁城、万里の長城、天壇公園などは、中国の長い歴史を感じることができ、とても迫力があり、日本にはない大きさであった。中国と日本の距離は比較的近い。こんなに近くで、こんな体験ができることに私は感動した。だが、誤解したイメージで、遠ざけてしまっている人も多いのではないだろうか。日本と中国の人々が、お互いを知り、関わるような機会がもっと増えて欲しいと思う。

おわりに

今回の訪中では、中国の文化体験や中国の方と交流などを通し、中国への理解を深めることができた。また、国際交流、他大学の学生との交流による、新たな人間関係の構築は、非常に有意義なものであった。これから社会に出ていく我々学生にとって、この訪中団での経験は、今後の人生の様々な面で生かされるものであると感じている。このような素晴らしい機会をいただけたこと、関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。

「訪中を通して感じたこと」 大溝梨郁

私は今回の訪中団への参加が初めての中国であり、初めての海外上陸であった。

私がこの訪中団に参加したいと思った理由はいくつかあった。それは大学での活動において海外の人とコミュニケーションをとることがあったこと、中国語の講義で中国の文化を学び実際に自分の目で見てみたいと感じたからだ。

今回の訪中を通して自分がこれまで持っていた価値観とは少し違った価値観を増やすことができた。また、私がこの訪中を通して印象的に感じたことは以下の二つである。

一つ目は中国人に対する印象である。今回の訪中で最も変わったことである。訪中する前は中国に対して抱くのは好印象よりもあまりよくない印象の方が多かった。しかし訪中によってその印象は逆転した。訪中前私は、中国人は冷たく怒りっぽい人が多

いという印象をもっていた。今回の訪中でかかわった中国人は少なかったが、お店で接客をしてくれた方々や大学生はとても親切で温かい人ばかりであった。

二つ目は日本との文化の違いを感じることも多々あった。最初に驚いたことは交通面である。私が訪中前に持っていた中国の交通に関する知識はいつでも右折をしていいということだけであった。頭ではわかっているにもかかわらず実際に車が来るとびっくりした。またクラクションをあんなにも鳴らされるのが日本では体験しないことだったため衝撃的であった。また、12月23日の夕食前に行ったスーパーにおいても文化の違いを感じた。中国のスーパーではお菓子などが量り売りされていた。そこで小さな男の子がそのお菓子を食べようとしていたのだ。私はそれを見て「だめだよ」みたいな雰囲気を出していた。数分たってみるとその男の子はお店のお手伝いをしていることが分かった。また、私の推測ではあるがそのお菓子を食べることが許されていた。最初様子を見てこれはどうすればいいのかと動揺した。だが、国が違うということでこのようなこともあるのだなあとと思った。そしてまた、私はその男の子と中国語で会話をすることができた。今回の訪中では中国語を使う機会が少なかったが、数少ない会話の中で意思疎通することができたことがうれしかった。小さなことかもしれないが、異国の地でそれができたことが自身となった。

以上が訪中を通して私が感じたことである。

これに加えて、私自身が訪中を通し成長できたところがある。それはコミュニケーション能力である。今回の訪中では日中関係だけでなく日日関係も大切にということ言われていた。最初は知らない人ばかりの班でやっていけるのかとても不安であった。だが、班のメンバーと仲を深めることができたし、それぞれの大学についてなども知ることができた。他の班の人との交流の機会が朝食のときしかなく、あまり話すことができなかったことが心残りではあるが、これまでの自分ではできないようなことを訪中団として参加しているときはできていた。これから、この経験を活かして頑張ろうと思う。

この訪中は自分にとってプラスになることばかりで参加してよかったと感じている。

6B 柿本 真季

私の中の中国のイメージといえば、活気に溢れている、独創性溢れるアイデアから生み出されるテクノロジーや流行が本当におもしろい、料理がおいしい、フレンドリーで笑顔のかわいい人が多いなど、良いイメージばかりだった。基本的に、この良いイメージは多少変化したり、そのイメージは本当であったと確信を持ったりすることはあれど、この訪中中に大きく変化することはなかったと思う。なので、私の中に少しだけあった中国に対する良くないイメージで、この訪中中に大きく変化したことをこのレポートでは書こうと思う。

日本人が中国人に対して抱く良くないイメージといえば、マナーが悪いとか、大声で喋るとか、そういうことだろう。私が中国人に対して抱いていた良くないイメージのひとつに客引きがひどく無理矢理物を買わされるというものがあった。だが実際中国でそのような場面に遭遇してみて、私の抱いていたイメージは変わった。

観光客向けのショッピングモールで買い物をしていて、買う気はなかったのだが気になる商品がありちょっと見ていたところ、店主の女の人が電卓を叩いて見せてきた。買わないからいいとジェスチャーで伝えると値段をかなり引いて買えと迫ってきた。店から出てもかなりしつこくついてきて、それでも買う気がなかったためいらないとその場を離れようとする、腕を引っ張ってなお交渉しようとするのだ。出発する前に集めた情報の中に、中国の人はしつこく買え買えと迫ってくるとあった。また、私と全く同じような経験をしている人を中国を旅している動画で見たことがある。日本人の感覚からしたら「しつこく買わせようとしてくる」「迷惑」となるだろう。私も日本にいてこんな人がいたら同じことを思ったかもしれない。だが、中国に行って中国人の気質を知って、彼らはこういう人達なんだと理解した。彼らはお金を稼ぐことが好きなのだ。そういう気質を感じ取り、私も買う気はないし買っていないのだが、買え買えと言われて不思議と悪い気は一切しなかった。むしろ、当初中国人に抱いていた無理矢理物を買わされるといふあまり良くないイメージから、商売か好きなんだという良いイメージに変わった。

日本人が中国人に対して抱きがちな良くないイメージも、中国人的な気質を理解していないからではないだろうか。中国の人は男女問わずとにかく快活でパワーに溢れている。中国に着いた時、真っ先にそれを現地の空気から感じた。声が大きいとかそういうこと含め、中国人の気質なのだ。

また、私が中国に抱いていた良くないイメージはもうひとつあるのだが、それは「日本人を嫌っている」ということである。ネットなどを見ていると、日本人と中国人はお互いあまりよく思っていないのかなと勝手に感じとっていた。また、私は世界史にはあまり明るくないのだがそれでも世界大戦時に日本人が戦争の時に中国で酷い行いをしたということは知っていた。そのような情報が私の中では先行していたため、中国の人、特にお年寄りの方はあまり日本人のことをよく思っていないのではないだろうかと思っていた。おそらく、同年代のあまりお互いの関係を詳しく知らない学生などは同じようなイメージを抱いている人が多いのではないと思う。

だが、現地で日本人だからと不当な扱いを受けることはなかったし、むしろ想像以上の親日っぷりにとても驚いた。現地の学生と交流した時には、オタ芸やアイドルのダンスを披露してくれたことにとても驚いた。どれも、日本や日本の文化が好きでなければ知り得ないものだった。もちろん、私のイメージ通りな「日本人のことをよく思わない人」も今回たまたま出会わなかっただけで、いるにはいるだろう。だが、国全体がそういう風潮かと言えば、絶対にそうではない。少なくとも日本のことを嫌っている人はほとんどいない。

私は日本と中国がもっと仲良くなればいいと思う。お互いのことをもっと知るべきだと思う。今回の訪中は本当に貴重という言葉では表しきれないくらい貴重な経験だった。この経験を自分だけのものにせず、得られたものや感じたことなど些細なことでも、伝えるのが私の使命だと思っている。

「がらりと変わった中国の印象」 木内愛

今回訪中団に参加した理由は、恥ずかしながら、中国語の授業で「安く行くことができる」と紹介されたから。という漠然とした理由からでした。何を学びたいからとかそういった具体的な目的は特にありませんでした。中国に行って中国語を話す機会が少しでもあればいい、そう思いながら参加したのです。

訪中団に参加する前の自分の中での中国への印象は、

- ・中国人は冷たそう
- ・中国人、中国は信用できない
- ・料理を食べたらお腹を壊しそう
- ・貧富の差が激しそう
- ・空気が悪そう

ざっくり言ってこんな感じてました。あまり良いイメージは持てなかったのが正直なところですよ。

しかし、いざ中国に行ってみると私が想像していた中国とはだいぶ違うものがありました。毎日の食事をするレストラン、学校交流、施設案内、人民大会堂などで中国人と接するうちに、日本人がとても歓迎されていると感じたからです。今までの偏見が少しずつなくなっていきました。それと同時に勝手に物事を決めつけていた自分への嫌悪感も生まれました。

人民大会堂へ行った時には日本と中国それぞれでパフォーマンスをしてくれました。お互いの文化を学ぶことができました。そして今、中国と日本はとても良い関係になってきていると感じることができ、良かったです。

自分の周りにいる人に中国のイメージや印象を聞いてみると、中国へ行く前の自分と同じで、そこへ行って見たこともないのに勝手に悪いイメージや印象、偏見を持っている人が多いです。なぜ印象が悪いのかと聞いてみてもその理由をはっきりしておらず、「なんとなく」などと明確な理由を持っている人はなかなかいません。中国から帰ってきて実際に自分の目で見たり考えたりした今、そのような考え方をしているのはとても勿体ないことだと思います。自分もそうだったように行く前から印象を変えようとしても無理なので、実際に自分で経験して考えることが大切なのだと本当に思いました。そして物事を勝手に決めつけている日本人はとても恥だとも思いました。

逆に自分の考えていたことが少し当てはまってしまった部分もありました。それは最初に述べた、「中国人、中国は信用できない」です。信用できないとまでは言い切れませんが、きちんとしたお土産屋さんでお菓子を買ったのですが、試食したものと実際に入っていたものが少し違ったからです。味は普通に美味しかったのですが、試食したものと中身が違ったのはだいぶ信用を失わせる行為だと思います。

今回の訪中で新しく発見したこと、分かったことがあります。それは中国のほんの一部で私が知らないことはまだまだあります。ですからこれから色々なことを体験して中国のことをもっと知りたいと思います。最初中国に行くことと決めた時には何の目的もなかったけど、この四日間で物事を見る目が変わったし、新しいことに挑戦することで自分にとって良い結果が生まれるということを知ったと思います。自分の人生において大きな転機だったことに間違いありません。

齋藤瑞生

人生で初めての中国にこの訪中団の団員として訪中出来てとても良かったと思えた5日間でした。普通の旅行では体験できないこと、分からなかったことをこの訪中を通して知れたと思います。

私の親友が日中ハーフであることから、中国にはもともと興味があり、大学生のうちに必ず行きたいと思っていた国でした。親友と出会うまでは、中国のイメージは「悪い」の一択でした。しかし、親友と出会い中国のことや中国人のことをたくさん聞いていくうちに、中国に対する「悪い」というイメージは払拭されました。しかし、ニュースでは、日本嫌いの国というイメージを植え付けさせるような報道も多かったですし、Twitterでも中国の話題になると大人たちが中国人を悪者だとし貶したり、見下すような発言をする人が多くいるので、若干の中国人に対する不安な部分があり、中国人を街中で見かけたりすると何か悪口を言われたりしないかな？日本のごとく悪く思っていないかな？など怖くなる時がありました。今回、訪中して、様々なところに行きましたが、出会った方みんな優しく、親切で、日本人を快く受け入れてくれていた感じがして、良い人がたくさんいる国だなと感じましたし、今まで来日していた中国人にでさえ不安を抱えていましたが、現地の中国で優しくしてくれる方々がたくさんいたので不安が一気になりました。訪中中に北京に留学中の親友が私の元に会いに来てくれましたが、帰りのバスを待っているときに一向にバスが来なくて不安がっていた親友に、中国人の女の子が「あなたが乗りたいバスどれ？来たら教えてあげるね」と声をかけているのを

見て、とても心が温まりました。日本での光景を思い出してみると、日本人は外国人が困っていても見て見ぬ振りが多い気がするし、実際自分も勇気がなく声をかけられないです。その時、私たちは普通に日本語で話していたし、外国人ということはその女性も気づいていたと思いますが、そんな中声をかけてくれたのだと思うと本当に素敵なお方だと思います。周りの中国人の方々も、知らない人同士でも助け合っていましたし、中国人は他人想いの人が多いなと感じました。

中国に行って、面白いなと感じたことは、万里の長城に行った際に、戦馬を祀っている場所をたまたま見つけて中に入ってみたら、そこに中国人のおじいさんが一人だけ見学していて、私たちを見つけて声をかけてくれました。おそらくこの場所が何という名前で、どういう場所なのかを教えていてくれたのだと思いますが、全部中国語だったので訳が分からず反応に戸惑いましたし、私たちが中国語が通じないと分かってても中国語で話すので正直ビックリしましたし、他の場所で中国人に話しかけられたり、タピオカを買ったりした時も全部中国語で英語を一言も話されなかったのも、相手が中国人じゃないと分かってても中国語を貫くスタイルが面白いなと感じましたし、一番印象的な出来事でした。

中国は、日本では悪者扱いされているように感じますし、中国人が嫌いだという大人はたくさんいます。実際のところ母の友人に、「鞆に毛沢東のキーホルダーとかつけておかないと唾かけられちゃうよ」とまで言われました。ネットで呟いている人も、母の友人も何を根拠に言っているのか分かりませんが、中国人と交流を持ったり、中国に行ってみないと気づけないことはたくさんあると思います。固定観念を強く持ちすぎることは自分の視野や発見を狭めてしまうし、そういう人が多いと友好が一向に良くなれないと思います。自分には大人の考えを完全に良い方向に持っていくことはできなくても、少なからず、中国人の方々が思っているほど悪い人ではないことや中国の良い部分を伝えることはできます。子どもが中国に対して悪く思っていないくても、大人の意見が反映されてしまう世の中なので、まずは身近の大人たちに訪中で私を感じたことを伝えていけたらなと思いました。友好が大きく進展できなくても、進展に少しでも貢献できればなと思います。

私は、将来看護師になることを目指して今勉強に励んでいます。看護師になっても、中国人と接する機会が多いと思います。そうなった時に今回の訪中で知れたことを活かして、思いやりの気持ちを持って、看護ケアを行ったり、共に仕事ができたらいいなと思いますし、それを通してもっと中国人と親交を深められたらと思います。

「日本と中国の文化と尊重」 坂本華乃

正直中国に対して今まで良いイメージはなかった。ニュースなどの報道でみる中国は、日本を敵対視し歴史の関係もあって仲が良くないのだろうと思っていた。また中国人に対してのイメージもあまり良くなかった。日本に観光で来る中国人は、所構わず大きな声で話すし、不愛想でいつも怒っている風に見えた。私の中でそのような固定観念がずっとあった。だからこそこの機会に中国について知ってみたいと思った。周りに流されず、自分の目で見て感じて、どう思うかを知りたかった。

まず中国について驚いたのは、たくさん的高層ビルだ。北京は首都というのもあるだろうけど、日本よりはるかに大きいビルに圧倒された。中国に行く前に、大学の中国語の先生が、「中国は 10%ヨーロッパ、90%アフリカ」という表現をしていた。中国は私の中で先進国というイメージだったのでその言葉を聞いたときは不思議に思ったが、実際に訪れてみてその言葉の意味を実感した気がする。高層ビルの数々や、若者の新しい企業施設などは日本よりはるかに進み、これからも発展し続けるのだろうと思った。しかしまだ交通ルールが整っていなかったり、トイレなどの日本人はあたりまえだと感じている整備が十分でなかったりと、どちらの顔もあると感じた。特に交通に関しては印象に残っている。常にクラクションが鳴っていたり、車道を思いっきり歩行者が渡っていたりしている光景は見たことがなかったので驚いた。実際中国訪問中に 2 回事故を目撃した。なんて危険な国だろうと思ったが、日本より人口がはるかに多いため、安全な文化を作り上げていくのが難しいのだろうと気づいた。これも中国の文化だと思うと、日本との違いを感じて楽しむことができた。

中国の大学に訪問させていただき中国の方と交流した。訪中前の中国人のイメージは、不愛想できついと感じていたが、実際接してみると全く違った。優しく丁寧に大学を案内してくれたり、自分から積極的に日本語で話しかけてくれたり、中国についてたくさん教えてくれたり、中国人の温かさを感じた。私たちが日本に来る外国人を温かく出迎えるように、中国人の人も温かく出迎えてくれた。訪中前、中国に行くことを他の人に伝えると、たくさんの人から「中国で大きな声で日本語を話してはいけない」と言われた。中国人は日本が嫌いだから何をしてくるかわからないと言われたが、全くそのようなことはなかった。中国の大学生、中国人のガイドさん、ホテルの皆さんたちにとっても優しく接してもらい、いろんな角度の中国を学ぶことができて嬉しかった。また中国人は礼儀が正しいと思う場面がいくつもあった。例えば大学訪問や歓迎会などの参加は正装だったり、目上の人を敬う気持ちがしっかりしていたりした。食事会場を出るときは必ず店員さんが「ありがとう」と言ってくれたり、お腹が痛かった私にトイレを譲ってくれたり、私も中国の方から見習うことがたくさんあると感じた。

私は今回この日本青少年代表団として中国を訪問でき、とても良い経験と学びになった。中国は日本と隣の国であるので、生活面や文化もあまり変わらないのではないかと感じていたが、生活面も文化も全く異なっていて面白かった。私の訪中前の中国に対しての考えと、訪中後の考えは一変した。私はバスガイドさんの、「これが中国の文化だ。日本と中国、どちらも良い文化があり、尊重すべきだ。」という言葉がとても印象深かった。日本ではありえないと思う光景も、これが中国の文化なのだと思うと自然に受け入れられたし、もっと中国の文化について知りたいと思えた。中国を学んだからこそ、新たに感じる日本の良さがある。

違いがあり、分かち合うからこそ世界は面白い。日本と中国、未来に向けてお互いが尊重しながら進み続けるのが良い関係性だと感じたし、そうだと嬉しい。訪中前の中国に対する固定観念を捨て、自分で新たな発見し感じる事ができてとても良かった。私が今回感じたことを、たくさんの人に伝えて日本と中国がより良い関係を作り上げていけるといい。またプライベートでも中国を訪れ、新しい中国を発見したい。

「訪中を終えて」 関 直稔

広い中国の広い北京のうちの、ほんの一部しか見ることができなかった忙しい旅であった。日中人の交流が普通の観光と同じくらいに少なかったことはとても残念だったが、企業訪問など自分の企画ではとても行かないようなところにまで行くことができたことに関しては一定程度満足している。旅程の内実としては本当に忙しいものであって深くまで浸ることは叶わず十分なものとは思っていないが、それでもやはり実際に訪れる事によって感じることはあったのでレポートにしたいと思う。

私よりも上の世代は、日中友好協会の青年部という人であっても、中国は遅れた国であったとか今も遅れている国であるという認識のほうが強いようであるが、私そしておそらく同世代は中国が既に十分発展している国であるという認識の人が多いものと思う。私が 9 歳の頃には中国は日本と GDP で肩を並べていたのだから、私にとって中国とは発展した大国であってそれ以外ではない。

北京市街は常に霞がかかっていて、スカイツリーや東京タワーのような遠方からも目印となるランドマークがなかったため、忙しさも合わさって自分のいる場所さえつかみにくかった。移動はほとんどおそらく環状線の高架道路を経由して行われたため、それも把握を阻害した要因かもしれない。だからどこが中心部に近くてどこが発展していてどのようなグラデーションを描いているのかといったことは私には全くわからないのだが、基本的にどこもかしこも一定の高層ビルであり明確に大都市であった。世界各地の都市は発展度合いが同じであっても趣が異なるというのはよく知られていることであろうが、北京はその様々な特徴の中でも生活感のなさが目立った。日本のようにコンビニが立ち並ぶのを想像するのは論外であるにしても、あまりに商店を見かける頻度が少なく感じた。調べてみると、かつて市街地で優先的であった屋台などは政策で姿を消し代替の商店もできていないのだという。代わりに市民は、インターネットを通じて品物を購入しているのだそうだ。かつて私が、インターネットにもっと幻想を持っていた時期に考えていた想像上の未来が現実北京にて完成しつつあった。しかし現実見るところに生活感がないというのは、東京に慣れている身からするとその無機質さがかなり異様に感じた。歓楽街のようなところは通った記憶がなく、東京で言えば永田町のようなところばかり訪れていたのも大きな原因だろうが通行人の少なさもそれに拍車をかけていた。地上に電車はほとんど通ってないに等しく、公共交通といえば地下鉄とバスくらいで地上を徒歩で通る理由がないのだろう。ほとんどすべての道路には側道があって、自転車やバイクが通っていたし貸し自転車まで整備されているのでますます徒歩である理由がない。土地の広さと後から発展した国特有のインフラの新しさそして生活感のない無機質さが今回の旅程で感じられた限界であった。

今回は観光部分では歴史的遺構を回るのみで、歓楽街のようなところに行くこともなかったし、交流でも中国人と話す機会は皆無と言っていいほどであった。中国北京を語るにはまだまだ不足が多いと思うのでまた北京自体に一人で訪れたいという気持ち強い。また中国そのものが広く、南方や西方にも訪れたい。日本にいるにしても何にしても、注目を欠かすことのできない国だと思うので今後の発展や動向に注視していきたいと思う。

「日中友好のために」 田中 菜月海

12月20日から12月24日の5日間という短い期間でしたが中国にいきました。19日には関西国際空港の白鳥にて研修会が行われました。初めはすごく緊張してなかなか班のメンバーと話ができませんでした。徐々に話せるようになりました。そして、ほかの人の訪中の理由を聞き様々な意見があり興味ぶかかったです。その後夕食でさらに絆を深め、早めに眠りました。次の日、中国国際航空の飛行機で日本を旅たちました。何回か飛行機には乗っていても緊張しました。また、キャビンアテンダントさんが中国の子供のそばにいて、話しかけているのを見て中国の人は冷たい人ばかりだと思っていたのでずいぶん印象が変わりました。そして北京空港に着きました。見るものすべてが大きすぎてすごく驚きました。この日は首都博物館に行きました。中国の昔の文化や習慣が少ししれてよかったです。

21日には、北京城市学院で学校交流をしました。北京の大学の教育のすごさにおどろかされました。その後天安門広場と故宮博物院にいきました。特に毛沢東の肖像画が印象的でした。夜には歓迎会を催していただきました。日本のオタゲーやakb48の踊りを披露していただき、中国の人は日本のことがあまり好きではないのかと思っていましたが、違うことが分かり嬉しかったです。また、最後にはみんなで世界で一つだけの花を歌いました。歌で中国の方とつながれたような感じがしました。

22日には万里の長城に行きました。世界史の教科書でしか見たことがなかったので生で見ると実際に歩くと故人の偉大さがよくわかりました。また、のぼっている最中に声をかけてもらい嬉しかったです。力になりました。

24日には中国の企業を見学させていただきました。どの部屋も働きやすいようにデザインされており、またスペースを貸すだけで

なく税金のことや法律のことの相談ができるのは良いなあと思いました。質問会では様々な質問が飛びかいこの企業の経営理念などが分かり勉強になりました。午後は日中大学生千人交流大会がありました。偉い方の挨拶が終わり、日本からは空手などの演技があり中国からは演奏と歌などがありました。中国の人が日本の千と千尋の曲を日本語で歌ってくれたのが一番印象的でした。中国から日本に歩み寄ってもらってるように感じました。また、それにこたえたいと強く思いました。中国での最後の夕食には北京ダックを食べました。みんなで集まる最後だったので時間が過ぎるのは早いなあと感じました。

最終日、北京計画展覧会に行きました。北京の街並みがよくわかりよかったです。そして、北京空港に行き中国をはなれました。少し寂しかったです。

この5日間を通して、中国人のやさしさに触れて訪中前は怖い印象や冷たい印象を持っていましたが違うことがよくわかりました。また、中国人だから悪いという考えではなく本質をきちんと見て判断したいと改めて強く思いました。また日本人同士の交流により、日本の良さを再認識できました。そして、中国と日本は歴史においても深いかわりがあり、お互いが歴史を深く理解し過去を許し共に手を取り合うべきだと思いました。また中国を訪れるさいには中国語をしゃべれるようになり、もっと深い交流をしたいと思いました。

「訪中を終えて」 永瀬美希

私は、今回の訪中が初めての海外旅行で不安がたくさんありました。正直中国に対してのイメージは悪いもののほうが多かった。日本が安全すぎる国だからかもしれないが、治安はあまりよさそうじゃないし、水は買わないと飲めない、トイレは流せないなど調べるとどんどんマイナスなことばかり出てきてしまいより不安になった。しかし、中国の情報はニュースやコラムなど他人の感情が入った情報でしか入ってきいていなかったので、ちゃんと自分の目で見てみようとも思った。

中国について一番驚いたことは車の数がとても多いこと、人口が日本よりもはるかに多いから仕方ないことだと思うけど渋滞にはまる回数もものすごく多かった。ガイドさんの話で、車のナンバーで走れる日と時間が指定されているときいて大国ならではのなんだろうなと感じた。また、日本では歩行者優先って考え方があっても中国はそういう法律ないのかなって思うぐらい横断歩道で歩行者が待っていても気にしないし、逆にまったく横断歩道とかないうところを人が渡っていても気にしないので、慣れてしまえば意外と楽かもしれないと思った。

中国に行く前まで中国人って常に怒ってしゃべっているのでは？怖いのでは？というイメージがあったのですが、万里の長城で一人のおじさんに話しかけられてイメージが崩れました。話しかけられたとき周りにまったく人がいなくて最初は何を話しかけられているのか全く分からなかったのですが、私たちが中国語を理解できていないとわかってからどっから来たのか聞かれてつたない中国語で返したら、笑顔で「上手！上手！」と返してくれました。全く知らない言語でペラペラと話しかけられたら誰でも怖いのは当たり前だなと思ったし、理解できればこんなにもうれしいものなのだなと感じることができた体験だった。また、もっと中国語を喋れるようになりたいと思った。

今まで中国についてあまり知らなかったというより知ろうとしてなかったから、一部の情報だけで中国=怖いって思ってきたけれど、団体行動だったということもあるが、実際中国に行ってみると全然怖さを感じなかった。知らないのに怖いとか決めつけてしまうのが一番よくないことだと感じたから、他の人にも中国のことをもっとしてから中国へのイメージを決めてほしいと思う。だから私ももっと中国について知って良さを広めたいと感じた。私は今看護学部で在学しているので、将来看護師になる身として、これからは中国の保健医療の面についても知っていきたいなと思っています。

日本に来る中国人がとても多いから、中国語できたら将来何かの役に立つかもしれないと履修した中国語の授業ですが、訪中団に参加して人民大会堂での日中青年友好交流大会に参加して、普通ならあまり味わうことのできない体験ができて履修してよかったと思っているし、参加して本当に良かったと思える五日間でした。

「視野を大きく広げることができた訪中」 半澤 成美

私は大学で国際キャリア英語コースを受講していることから、ビジネス英語の学習を進めてきました。しかし「英語ばかりにとらわれたくない」「視野を広く持ちたい」と考え、今回訪中に応募することを決めました。また、今年度から大学で中国語の授業を受講し学習を始めたことも中国に興味を持ったきっかけです。私は観光学と環境学を専攻しているため、訪中ではこれらの観点から感じたり考えたりすることを念頭に置いて、5日間を過ごしました。

訪中前は、中国に対してあまりいい印象を持っていませんでした。共産党一党での政治体制や食品の安全面への不安、短気な性格の人が多いのではないかなどと予想していました。しかし、学校やお店で実際に交流してみて、中国人は落ち着いていてポーカフェイス、そして知的だと感じました。そして微笑んだ顔がとても素敵で、優しい印象でした。

中国は、予想よりもモータリゼーションが進んでおり、高級車がとても多くみられました。しかし常に渋滞気味で、交通事故も多発、歩行者よりも車優先のような社会が広がっていました。ここが、中国がまだ発展途上であると感じた点でした。また、街中や建

物内の照明が暗めだったことに驚きました。北京の中心部でも、日本に比べてキラキラしてなく、ビルの電気がついていない部屋が多くみられました。中国は世界で電力消費量が最も多いことは知っていたので、正直、使いたい放題で電気を使い、まぶしいほどの明るさでいっぱいだと予想していました。なぜ北京の街中が暗いのかを調べても見つからなかったため、日本が明るすぎるのではないかと考えました。このように、北京を訪れて実際に目にして感じたことが多くあり、日本だけに閉じこもってはい世界が見えないと身をもって感じました。

最も心に残ったのは、日中大学生千人交流大会でした。なかなか入場することができない人民大会堂で、さまざまな中国の文化を感じることができました。なかでも、「朋友」の合唱を聴いた瞬間にとっても感動し、日本に帰国してからも度々聴いています。中国の歌は全く知りませんが、訪中の機会に素敵な曲に出会えて、とても嬉しく思っています。

日本の他大学の学生との共同生活も、多くの刺激を受けました。さまざまな分野の専攻の人がいて、バスの中や食事の際に互いの将来の目標を共有することができました。今回の訪中を通して、さまざまな人々との交流ができたことに感謝しています。中国が大好きになったとともに、中国全土のさまざまな場所に行ってみたいと思いました。

今回の反省点は、日本人とほとんどの時間一緒に過ごし、中国語や英語を積極的に使用しなかったことです。買い物や大学、企業訪問の際に自分から話しかけるべきであったと思いました。

私のように、中国に対してあまりよくない印象を持っている人は残念ながら日本に多くいると思います。今よりもっと日本と中国の交流が盛んになるべきです。貿易の面においても、互いの存在が必要不可欠であり、日本から中国に対する感謝の気持ちを私たちは常に持ち続けることが大切だと思います。訪中に参加させていただいた私の使命として、訪中での経験を家族や友人など周りの人々にたくさん共有し、より多くの人々に中国の魅力を伝えていきたいと思っています。

日中友好協会の皆さん、今回は貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

「中国と日本」 丸山由希奈

私が日本青少年代表団・友好協会分団に応募した理由は、高校生の時に通っていた学校が国際交流が盛んな学校だったため、そこで国際交流に興味を持つようになりました。今までにシンガポール、オーストラリアへ行きすごく楽しく良い経験をしました。そして学生のうちに海外へ行けるチャンスがあるなら行きたいと思ってました。また、大学の授業で中国語を履修していることもあり、中国語の勉強のためにも思い今回の訪中へ参加をしました。

中国に着き、一番最初に驚いたのは交通です。日本では人が歩いていると車は止まりますが中国では止まりません。車が優先でした。車との車間距離がとても近く慣れるまで怖さを感じました。道を渡りたいときに、横断歩道で待っていても車は止まってくれず自分たちがタイミングをみて渡らなければいけません。渡っていると車がすぐ近くに来てクラクションを鳴らされます。それもまた怖かったです。

次にトイレです。日本のトイレは全部のトイレに紙が付いていて流すこともできます。もちろん水道も付いていて手を洗えるし、鍵も閉めることができます。それを当たり前に思っていたのですが、中国では違いました。紙はそれぞれの個室には付いてなく、トイレの入り口に付いていてそこから必要な分だけ取る仕組みでした。そして、下水道が細く詰まりやすいからあまり流さないでという注意をされました。紙はどうするかというと、個室にゴミ箱がありそこに捨てるという仕組みになっていました。さらにドアに鍵が付いていない所や手を洗う場所がないところもありました。日本と中国は隣国だけど大きな違いがあるということに気づきました。

そして最後に建物すべてが大きくそこにも驚きを感じました。バスで街中を走っていると、ビルのようなものだったりお店だったり見るもの全てが大きいという印象を持ちました。私が住んでいる所は田舎なので、中国のような大きい建物があまりなく羨ましく感じました。また交流をした大学も規模がとても大きかったです。大学には報道フロアのような所があり、大学ではなく会社のように感じました。

中国へ行く前の印象は、「怖い」「空気が汚い」「日中の関係は悪い」などとマイナスなイメージを持っていました。しかし実際に行き自分の目で確かめると、空気が悪いと思うこともありましたが、中国の人たちは優しく日中の関係というのもメディアが言っているほど悪くないという印象を持ちました。見学場所や万里の長城を登っていると、「もうすぐ着くよ」だったり「がんばれ」という声をかけてくれる中国の人たちのもいて、私が思っていたイメージとは違くとも優しく、声をかけてくれたことがうれしかったです。交通やトイレには正直あまり良い印象はありません。しかし日本と比べると物価がとても安くショッピングでもたくさんのお土産を買うことができました。物価の面では羨ましく思いました。中国とはどんな国なのかというのは自分が行ってみたいと分からない部分もあり、実際に行き文化など知ることができて良かったです。行く前は不安もありましたが、中国に着くと不安はなくなり楽しむことが出来ました。たくさん場所を見学したり、人民大会堂に入り、日中大学生千人交流大会が出来たことなど日本青少年団・友好協会分団に応募しないと出来ないことが多くあったと思うのでとても良い経験になりました。

「自分が中国とどう付き合うか」 水畑翔

訪中団を通して学んだこと、自分のこれまでの中国についての考えを照らし合わせながらまとめていこうと思う。

自分が初めて中国へ行ったのは今回が初めてではない。というのも自分の母が中国人であるためである。小さいころから何度も中国に行き現地で感じた思いと自分の周りにいる友人との中国に対してのギャップを小さいころから感じていた。周りにいる友人は中国の話になると決まって、パクリ、声がでかい、非常識といった。悪い部分しか話さず自分は親が中国人であるためそういう話が苦手だった。こういった経験から自分自身がまず中国についてもっと理解しないといけないと考え独学で中国語の勉強を始めた。そんな時今回の研修の話があったため今回訪中団に参加した。今回の研修で一番思い出に残ったのは北京の友達ができただことである。彼は自分と同じ20歳でたまたま友達に行ったバーの店員である。自分から声をかけたが自分の中国語はたどたどしいのに何一つ笑わず真剣に話を聞いてくれたのがマナーを感じたし中国語を学んでよかったと感じた。人も話を聞くときの礼儀だから当たり前だと彼は言っていた。次の日彼のご飯をおごらせてくれと連絡があったが自分はもう帰国するため会うことはできなかった自分はなぜこんなに親切にしてくれるのかと思った。中国から見た日本の印象を知らないため、日本と中国の関係について聞いてみた。すると彼それは政治の話で人と人が尊敬しあうのが大事だと言った。当たり前なことかもしれないが自分は一番このことが今回心に残った。自分は中国人がこうしてくれるのがうれしかった。中国でも日本のことを嫌いな人もいれば好きでいてくれる人もいる。やはり、国なんかにとらわれず一人一人尊敬しあえるといいなと思う。

二つ目の印象に残った出来事はスーパーを探しているとき道に迷ってホテルがどこにあるかわからなくなったとき周りにいた中国人の方がホテルまで連れて行ってくれたことです。自分も日本で外国人に道を聞かれたことがあるが全く英語を話せないのを道を教えてあげることができなかったことがあった。しかし、その方は親切にホテルまで送ってくれました。そしてお礼を言うところまで行ってしまった。中国人は何か人助けをしても見返りを求めたりしないところがかっこいいなと感じた。人にもよるかもしれないが今回の訪中団でいい中国人とたくさん出会い交流できて本当に良かったと思いました。またこんな機会があれば必ず行ってみたいと思います。

相手の文化を尊重しないといけないと思う。ここが日本と違うからダメとか基準が日本になっていることが多い。日本も中国も相手の国のことを人の目が入った情報でしか見たことないため、多くの誤解が生まれていると思う。自分はこの二つの国の懸け橋になりたいと思いました。そのためにまず、言葉を覚えないといけないのでしっかり頑張ろうと思います。

「私たちの訪中と芽生えた義務感」 安保 慎哉

私は今回参加し中国の文化を肌で感じることで、たくさんのことを学び日本へ持ち帰ることができた。今では、中国はとてもいい国だったため、また行きたいと心から思う。しかし、訪中以前のぼんやりとした中国への認識は、あまりいい国とは言えないものだった。このような、自分の変化が起こった理由は、訪中での経験が全てだ。

まず、中国は観光地としてとても魅力的で、日本人にとっても親しみやすい国だということを学んだ。私は、今まで中国に限らず、海外へ行くことが初めてだった。その際、準備の一環として、周りの人にアドバイスを求めることがあったが、やはり、悪いイメージがほとんどだった。多くの日本人にとって中国の一般的なイメージは、一昔前の品質の悪い中国産製品や、有名なキャラクターのオマージュ、反日教育や大気汚染などをまとめたものとなっている人は少なくないのだろう。そういった声を聴いて、私も訪中に対する不安はかなりあった。しかし、現地で過ごして感じたことは、それらとは真逆の、良いイメージばかりだった。上記のような悪いイメージは全く気にならなかったのだ。天安門や午門を訪れ、それぞれの歴史、建造物の美しさやそれぞれに込められた意味を知り、圧倒されとても感動した。万里の長城はあまりにも広大で、終わりが見えないほどだが、全て重機などを使うことなく築き上げた先人達への敬意、そして、上った先で味わえる達成感は今までにない経験となった。宿泊施設や街並みも、とてもきれいで、日本と比較すると至らない点もあるが、成長が期待できる上に、料理などは中国ならではの良さがある。他にも良かったところはたくさんあり、訪中時に不安に思うことは、自分の語学力くらいであった。このことから、中国は魅力的で親しみやすいということを学んだ。

そして、中国に住む人々は、メリハリがはっきりしていて優しい人もたくさんいるということが分かった。街中を歩いていると、路上でタバコを吸ったり、談話をしているひとを度々見かけた。中には、料理用のエプロンなどを着けたままの人もいた。これらは、一部を除いて、日本でも見かけることはあるだろう。だが、あまり綺麗なものとはいえないため、これから食事をするレストランの近場がそういった状態であれば、少し不安を覚える。だが、レストランに入ってみると、不安はすぐにすぐに吹き飛ぶ。一人ひとり丁寧に迎え入れる接客、ミスや無駄な動きもほとんどなく料理は食卓に運ばれ、料理人たちの中には髪を坊主にして修行中と思われる人もいた。このような、歴史と規律を感じる素晴らしいレストランばかりだった。このことから、仕事とプライベート、ONとOFFの切り替えがとてもしっかりしていて何事にも全力で取り組むという姿勢を感じた。レストランの他に、デパートやコンビニでは人々の優しさを感じた。デパートで、トイレの場所が分からず歩き回っていると、簡単な英語とジェスチャーで場所を教えてくれた。自分から聞いたわけではないのに、私の行動などから推測してわざわざ声をかけて教えてくれることにとても思いやりを感じた。さらに、宿泊するホテルの近くに、コンビニがあったので自由時間に何度か立ち入ることがあった。最初は冷たい接客だったのだが、何度か訪れると、最後には、商品の袋詰めを手伝ってくれるようになった。こういった優しさは日本でもあまりないだろう。

これらのことから、中国には魅力的な観光地やそこに住む人々がいて、日本にとってとても親しみやすい国だということが分かつ

た。

「自分の目で見る重要性」 山本真輝

2019年12月20日から24日にかけての訪中ができることと決まって以降、私は中国に足を向かうことが出来るという喜びと多少の不安が混在していた。ただ、すでに私は日本で多くの中国人留学生と関わる機会があったため、中国に対するイメージはある程度具体的なものとして心にあった。それでも「百聞は一見に如かず」という諺があるように、実際に中国を見ることにより非常に有意義な経験となった。まず、中国人との交流を経て私がどのように感じたかについて述べる。もちろん、「中国人」といった主語を大きくする行為は本来正確性という面で好ましくない。しかし今回は単純化のため「中国人」と「日本人」に人種を限定することをご了承いただきたい。

我々が北京空港について初めに交流のあった中国人はバスガイドの方であった。彼はとてもユーモアの溢れた男性で、日本語もとても流暢だった。彼のガイドは日本のそれとは1つ大きく異なる側面があった。誤解を恐れずに言うとそれはお節介であったということである。日本のガイドさんの多くは形式上の説明や注意に留めるのが一般的だが、彼の場合は耳に聾が出来るほど交通マナーなどに関する注意をして頂いた。初日の段階ですでに日本人学生と打ち解けていて、近所のおじさんのような雰囲気すらあった。私のこれまでの中国人のイメージでは、仕事という枠組みでの人間関係はあまり深入りしてこないのではないかと考えていた。しかし、彼を見る限りはそんなことはなく、むしろ日本人よりも心の距離が近いと感じた。追加で述べると、私のグループ(6班)は最終日のみ違うガイドの方に案内していただいたが、その方も同じような印象を受けた。このことから中国人との交流という面で積極的に関わりたいと感じるようになった。もし再び私が中国を訪れる機会があれば躊躇わず中国人に話しかけてみたいと思う。

日本人と中国人の価値観は日本海を介しているということもあり相対的に異なる点があるが、それらはあくまで相対的なものであり、例えば欧州の方々と日本人を比較した差と比べると微々たるものであると感じた。そのため、言語の壁はあれ同じ東アジアの国として協力することは容易であると思う。今回の訪中で私は多くの中国人に様々な質問をしたが、すべての中国人がとても親切に答えてくれた。私は中国語がほとんどできないので、日本語か英語でしか会話はできなかったのも、どちらも話せない中国人と会話するのは困難であった。しかし身振り手振りで一生懸命答えてくれたのはとても印象に残っている。訪中でかかわった中国人のうち数人とは連絡先を交換できたので、今後も交流することが出来る。このような人脈を超えたコミュニティの形成は、今後の私自身の人生に大きく役立つだろう。

最後にこの訪中全体の感想を述べたい。私にとってこの訪中のメリットは、中国人と交流ができたこと、国外の空気を感じることが出来たことなどである。ただし、1つだけ不満があるとすれば、それは同じ中国人の学生との交流があまりできなかったことである。社会人の中国人との交流はできたが、学生との交流はあまりできなかった。その点は本来の訪中の趣旨からは少しずれているように思える。同世代の人とのコミュニケーションは文化交流・隣国としての交流の面でよい効果をもたらすと考えられる。そのため次回訪中をする際はもう少し同世代との交流の場を設けてみてはどうだろうか。ただし、この点を考慮しても今回の訪中は素晴らしい経験となったので運営をして頂いたすべての方に感謝している。さらなる日本と中国の交流の活発化を願っている。

「文化を受け入れること」 横田千尋

今日、日本人の中国に対するイメージはあまりよくないと思う。クラスの人に中国に対する印象について挙手してもらうと悪い印象を抱く人がほぼ全員だった。報道で尖閣諸島の占有問題や、大気汚染、食品偽装、コピー品などの問題が取り上げられているからだと思う。しかし私は訪中前から中国に対して悪い印象ばかりを持っているわけではなかった。中国は日本よりはるかに歴史が長く、文化が多様で面白いと感じていた。また近年は科学分野も凄い勢いで発展している国だという印象である。訪中後、私の中国に対する良い印象は変わらなかった。博物館、歴史的建造物などから中国数千年の歴史と文化を十分に感じる事ができた。また、北京の中心部のビル群を見て本当に驚いた。日本では考えられないほどの超高層ビルが豪華な電飾に彩られ立ち並び、頭の中に描く未来の都市のようだった。一方多くの日本人が抱く中国に対する悪い印象については、空気は日本ほど澄んでおらず、ショッピングモールで平気でコピー品も出回っているため変わらなかった、とも言える。しかし中国を実際に訪れて思うのはこれも「中国らしさ」なのだという事だ。道路では人より車優先でクラクションを鳴らしまくり、店員は強引にでも商品を買わせようとする。私は中国人から溢れるエネルギーを感じた。日本とは異なる、中国の強気の姿勢、国民性で北京はここまで発展してくることが出来たのだろう。訪中後に私の中国に対する悪い印象が拭えなかったというよりは、「中国らしさ」としてある程度受け入れることが大切だと考えるようになった。

今後、日本と中国はどのように付き合っていけばいいのか。中国は日本の最も重要な貿易国の一つであり、今よりもっと関係を深めていくことが必要だと考える。近年「爆買い中国人」というように中国から日本に来る人は年々数を増やしている。日本人は中国のことをメディアからだけでなく体験から理解しようとしているだろうか。私は実際に自分が体験しなければ物事の実態を掴

み、最適な対応をするのは難しいこともあるだろうと思った。2019年は日中青少年交流推進年となり、5年間で3万人規模の日中相互交流が行われることが合意され若者の両国間の関係に対する意識は向上すると思う。これから社会を担う私たちが互いのことを考えられるようになることで日中関係はこれから良くなっていくと思う。

この5日間の体験は私の人生にとっても良い影響を与えてくれた。まず日本と中国の関係を見直し、改めて中国は大切なパートナーとして付き合いがなくてはいけない相手と気付かされた。私は大学で化学を専攻しており、今後の研究活動などで中国人と交流する機会があるかもしれない。そのために中国語をもっと勉強して話せるようになりたいと思う。また日本から離れて海外に行ったことで様々な面で自信がついたと感じる。殻に閉じこもっていた自分が、他と交流する事の楽しさ、大切さを実感する事ができた。今回の交流を通じて得たものや感じたことをたくさんの人に伝えていきたいし、これからも中国と何らかの形で関わっていききたいと思う。